

研究ノート

小学校社会科「地域教材開発」におけるウェbbing法の有効性  
—社会科教員養成における取り組みを事例として—

松井克行

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成27年1月13日受理)

**The effectiveness of using the webbing method for the development of the study of community  
in social studies' classes at elementary schools: A case study to make a teaching plan  
in the social studies teacher training course**

Katsuyuki MATSUI

*(Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University)*

(Accepted January 13, 2015)

**Abstract**

The purpose of this paper is to show the effectiveness of using the webbing method for the development of the study of community in social studies' classes at elementary schools. The analysis object is the 80 teaching plans that our university students made in the fall semester of 2013 in the social studies teacher training course.

Results of this analysis are below:

- 1) The students made the teaching plans of the study of community by using Dr. Hirokazu Seki's webbing method model in social studies "Hiroshima oyster".
- 2) The 80 students used the Seki's webbing method and developed the teaching plans of community in social studies' classes at elementary schools. They had 47 kinds of themes, for example, "takenoko (bamboo shoots)": produced in Fukuoka prefecture, "baked seaweed": produced in Saga prefecture, "horse-meat sashimi": produced in Kumamoto prefecture, and so on.
- 3) Quality of the teaching plans are fairly good because 40 teaching plans got A+ and A Classification criteria.

Key words : Social studies' classes at elementary schools 小学校社会科  
The development of the study of community 地域教材開発  
Teacher training course 教師教育  
The webbing method ウェbbing法

## 1. はじめに

日本の小学校社会科のカリキュラム編成原理は、同心円の拡大法を基礎としており<sup>1</sup>、身近な地域の学習が、社会科が始まる小学校の第3・4学年での学習内容となる<sup>2</sup>。従って、教科書には、他地域の事例が例示されているに過ぎず、教員が、それぞれの市（区、町、村）、県（都、道、府）の独自教材を開発しなければならない。その労力を補うため、県や市レベルで副読本が作成されているのが通常である<sup>3</sup>。

しかし、副読本の内容は、教員が適宜、抜粋して用いることを前提に作られており、副読本に沿えば授業が展開できるような編成となっていない。それゆえ教員各自が、所属する小学校の校区を中心に、学校の周りを探査し、それぞれの学校に応じた地域教材を探ることが求められる。実際の授業においても、まず「校区探検」から3学年の社会科学習が始まるのが通常である。

従って、小学校の社会科教員養成の課題の1つは、学生各自が、自ら「地域教材開発」をするためのスキルを身に着けることにある。その際、他教科とは異なり、第3・4学年の社会科教科書は参考程度でしか活用できず、副読本も同様である<sup>4</sup>。

それにも関わらず、社会科の学習指導要領では、「地域の産業や消費生活の様子」、「地域の地理的環境」、「地域の発展に尽くした先人の働き」等の「地域における社会的事象を観察、調査するとともに、…略…、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする」との目標の下、「『生産』については、農家、工場などの中から選択して取り上げること」、「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」、「…伝統や文化などの地域の資源を保護・活用している地域を取り上げること。その際、伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域を含めること」と、まさに、地域尽くしの内容である<sup>5</sup>。

このような状況の中で、初任の教員や教育実習生が、優れたベテラン教員の教材開発の域に少しでも近づくために効果的なツールが、「地域教材開発」におけるウェビング法である。

本稿では、筆者が、科目「社会科指導法」（対象：3年以上）（2013年度秋学期）において、ウェビング法を活用した「地域教材開発」の指導の際に学生が作成した学習指導案（単元指導計画）80人分を

研究対象として、小学校社会科「地域教材開発」におけるウェビング法の有効性を明らかにしたい。

## 2. 小学校社会科におけるウェビング法の活用研究

本章では、元小学校教員で現在は大学教員である關浩和が開発した「社会科ウェビング法」を紹介する。ウェビング法のWEBは「クモの巣」の意味であり、「学習者の既有的知識や経験、イメージを組み込む方法である。つまり、構成要素（ノード）とそれらの要素の関連（リンク）が、ネットワークのシステムとして構成されていくのが、社会科ウェビング法であるといえる<sup>6</sup>」。

授業設計者自身が、学習テーマから関連する事象に気づき、社会構造の中に、それを位置づけ、構造化するツールとなりうる。関係性が視覚化（見える化）されることにより、授業設計が容易かつ、一定の質を保障できる。

關は「社会科授業において、ウェビング法を活用する意義は、他者との交流に基づいて学習者が、主体的に知識の構造を図る学習を保障できるところにある<sup>7</sup>」と、あくまで授業内での意義を述べるに留まるが、本稿では、さらに、その準備段階としての授業設計者による単元設計段階でも、このツールが、有効であることを示したい。

以下の「図1」が、授業で用いた、社会科ウェビング法の基本的なフォーマットである<sup>8</sup>。中央の（ ）には、学習テーマとなる「地域の特産物、地場産業、伝統産業」が入る。

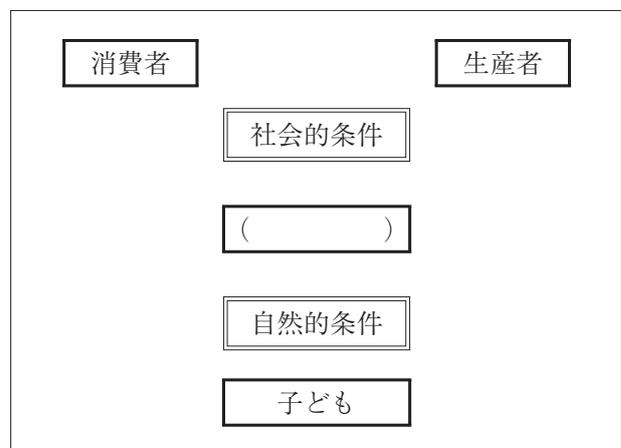


図1 「社会科ウェビング法」を活用した単元開発の基本的フォーマット

（小学校第3・4学年「地域の特産物、地場産業、伝統産業」）

それぞれの「地域の特産物, 地場産業, 伝統産業」が, その地域に存在する「社会的条件」と「自然的条件」を, 「消費者」と「生産者」と「子ども」(自己)の視点から関連づけていくのである。

この点に関し, 關は, 『『時間』・『空間』・『人間』』という三つの『間』を意識して, 子どものトピックに対応していく状況設定になっている<sup>9</sup>と説明している。「時間」には, 「地域の特産物, 地場産業, 伝統産業」の確立のために努力や工夫を行った先人の具体的事例や, 未来予測が含まれる。「空間」には, 「社会的条件」と「自然的条件」という空間を構成している内容からの視点と, 身近な地域から日本, 世界という空間領域の視点が含まれる。「人間」は, 「時間」と「空間」に生きている。個人の働きから集団・組織としてのシステム化までを視野に含む。図1では, 「消費者」と「生産者」と「子ども」(自己)が含まれる<sup>10</sup>。

具体的なウェビング図の例を示そう。図2は, 關が, 「広島かき」をテーマに作成した, 言わば「見本」としてのウェビング図である。

ウェビング図には, 「広島かき」という具体的な特産物に関する, 以下の多様な関係性が書き込まれて関連付けられている。

「社会的条件」では, 「かきの生産方法」, 「養殖法の開発」といった生産のノウハウや, 「生産者」側の工夫や努力に関する点として, 「交通・運輸」, 地域の発展に尽くした先人の働きを示す「人間の知恵」, 歴史的起源を示す「かき養殖の歴史」が示されている。また, 食文化としてのかきの一面を示す「かきのエピソード」がまとめられている。他方, 「消費者」側の関係性を示すものとして, 「食の文化」(前述の「かきのエピソード」との共通性から, 私見では両者を1つにまとめて「食の文化」として「消費者」側に位置付けるべきと考える), 「食料輸入の問題」が挙げられている。

「自然的条件」では, 「地形」, 「気候」, 「太田川」, 「かきの生態」, 「環境問題」が挙げられている。

社会科ウェビング法の特徴は, 上記のように, 授業設計者自身が, 学習テーマから関連する事象に気づき, 「ウェビング図」により視覚化された社会構造の中に, それを位置づけ, 構造化できる点に求められる。図2では, 学習テーマ「広島かき」との関係性が視覚化されることにより, 授業設計が容易かつ, 一定の質を保障できる。

關は, 「ウェビング図」を基に, 単元「物をつくるしごとー広島かきをそだてる」(全12時間)を

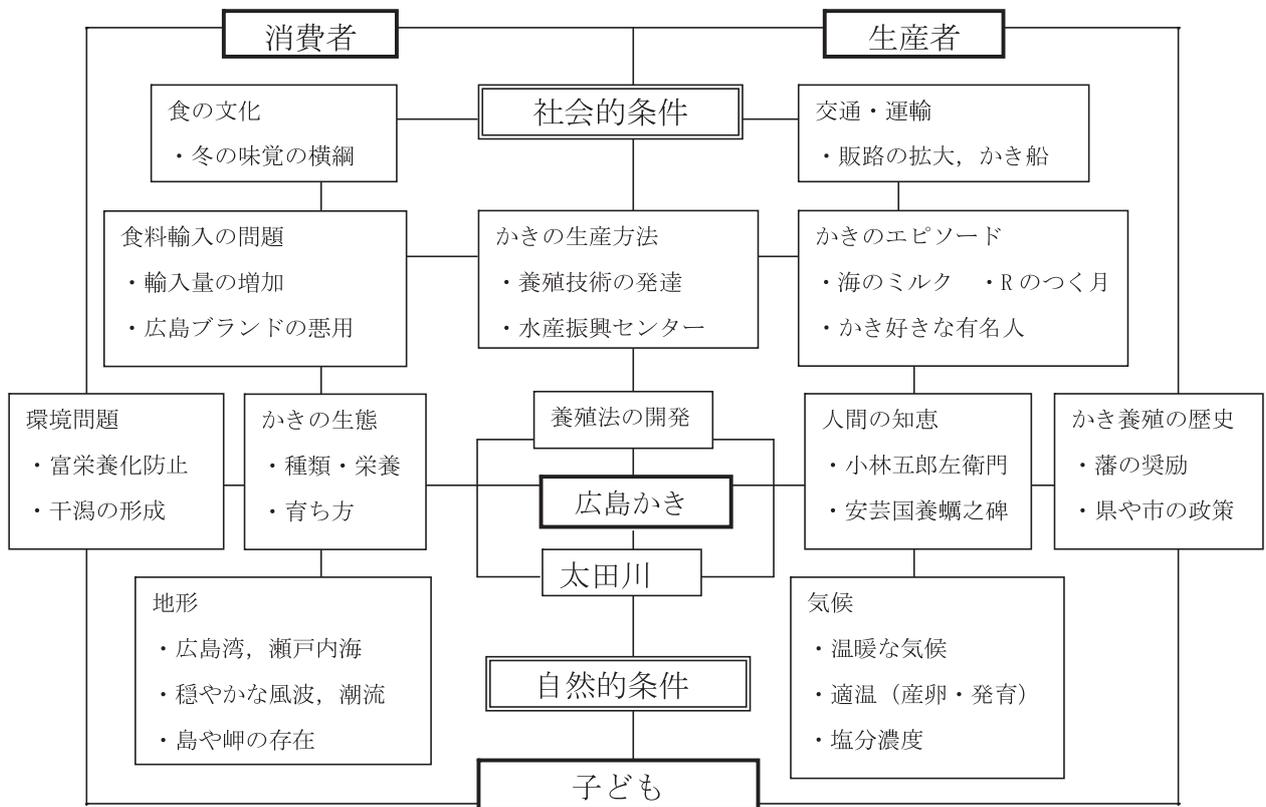


図2 「広島かき」ウェビングの基本的視点<sup>11</sup>

表1 「物をつくるしごと—広島かきをそだてる」の単元展開

時	主な問い
1 ・ 2	○「広島かき」から何をイメージしますか。 ・かきには、どんな栄養があるのだろうか。 ・かきは、どこでどのくらい生産されているのだろうか。
3 ・ 7	○広島かきが、日本一の生産量をほこっているひみつを調べてみよう。 例：条件？ 生産方法？ 歴史（起源）？ 全国流通できた理由？ ○なぜ、広島では、かきが日本一生産されているのかを説明してみよう。
8 ・ 9	○広島では、なぜ日本一のかきの生産をほこっているのだろうか。 ・広島湾が、なぜ、かきの生育に適しているのだろうか。 ・広島では、いつ頃からかきをとって食べていたのだろうか。 ・広島かきの養殖技術は、どのように変化していったのだろうか。 ・広島かきが、全国に流通することができたのはなぜだろう。 ・広島かきの筏式垂下養殖法には、どんなひみつがあるのだろうか。
10 ・ 12	○広島かきの生産が伸び悩んでいるのはなぜだろう。 ○これから広島かきを元気にするためには、何が必要だろうか。 ○広島市には、どんな特産品がありますか。

社会認識教育学会編『小学校社会科教育』学術図書出版社、2010年、pp.70-71の「表5.10」を、筆者が簡略化した。

開発している。「表1」に見られるように、「図2」で示された「社会的条件」、「自然的条件」、「生産者」、「消費者」の各構成要素（ノード）とそれらの要素

の関連（リンク）が、単元開発に活用され、「子ども」が、「広島かき」をネットワークという全体的な視点で認識することが目ざされるのである。

### 3. 社会科教員養成における取り組み例 —「社会科指導法」の提出課題—

本章では、2013年秋学期の「社会科指導法（3年）」で提出用課題として実施したウェビングの基本的視点の作成と、それに基づく「学習指導案（単元計画を含む）」80通を研究対象として、分析を行う。

#### (1) 多様なテーマ設定

以下の「表1」のように、学生80人に対し、47種類もの多様なテーマが設定された。佐賀県（17）が最も多く、長崎県（8）、福岡県（7）という順に地域的偏りが見られるのは、学生の出身地の偏りによる。授業で指摘した「地域の特産物、地場産業、伝統産業」は、佐賀県の「有明海の手巻」、小城市の「小城市羊羹」、有田市の「有田焼」、唐津市の「唐津焼」、佐賀市の「佐賀ほのか（いちご）」程度であったので、学生たちが、主体的に自らの出身地の産業や名物をテーマとしたのであり、その多様さに驚かされた。その要因として、課題提示時に、「できる限り、学生自身の地元の産業や名物をテーマとした方が、興味・関心も高いことより、より深く教材研究ができるし、将来、地元で教職に就いた時にも役立つ。また、他者の真似（剽窃）は厳禁であり、稚拙でも独力で作成することに意義がある」と、強く勧めたことも若干影響したものと推察される。

表2 「多様なテーマ設定（47種類）」（筆者作成）

福岡県 (7)	1	福岡県大川市の家具	長崎県 (8)	25	長崎カステラ
	2	福岡県のあまおう（いちご）		26	佐世保独楽（コマ）
	3	福岡県のタケノコ		27	長崎県の枇杷（びわ）
	4	八女茶		28	長崎県のあじ・さば
	5	辛子明太子		29	対馬しいたけ
	6	久留米ラーメン		30	長崎かまぼこ
	7	福岡市みやま市瀬高町の樟脳		31	壱岐焼酎
佐賀県 (17)	8	有明海の手巻	熊本県 (4)	32	長崎ちゃんぽん
	9	小城市羊羹		33	熊本県の馬刺し
	10	有田焼		34	熊本県のからしレンコン
	11	唐津焼		35	熊本のデコボン
	12	佐賀ほのか（いちご）	宮崎県 (2)	36	熊本県人吉市の球磨焼酎
	13	鳥栖市のマコモタケ		37	宮崎県延岡市の空飛ぶ新玉ねぎ
	14	嬉野茶		38	宮崎県の完熟マンゴー
	15	呼子のイカ		39	鹿児島のカライモ

16	佐賀のまるぼうろ	鹿児島県 (6)	40	鹿児島県出水郡長島町のブリ
17	三養基のアスパラガス		41	鹿児島茶
18	佐賀のハウスマカン		42	灰汁巻き (食べ物)
19	有明海のむつごろう		43	さつまあげ
20	佐賀市大和町松梅の干し柿		44	鹿児島黒豚
21	佐賀牛		大分県 (1)	45
22	佐賀県鳥栖市の製菓	沖縄県 (1)	46	沖縄県のサトウキビ
23	さがびより (米)	北海道 (1)	47	北海道のじゃがいも
24	佐賀の七賢人			

なお、筆者のように、九州出身ではなく（大阪府出身）、初めて佐賀県に赴任し、初年度の授業を担当した者にとっては、未知のテーマが多く、大変勉強になった。学生のほとんどが九州出身者であり、九州各県が農林水産業がさかんで、それぞれの特産も多いこともあり、学生たちが、それぞれの出身地域の名産を調べよう、と意欲的に取り組んだようで、学生達の感想も概ね好評であった。なお、上記のテーマの中で、私自身、最も驚かされたのが、鹿児島県（他、南九州の県で見られる）の「灰汁巻き」という、「一晩、灰汁（あく）につけたもち米を竹の皮で包み、灰汁を加えた水で3～4時間炊き込んだ、「干した竹の皮にもち米をくるんだ『ちまき』<sup>12)</sup>」という食べ物であった。筆者にとっては、全くの「未知との遭遇」であったからである。

## (2) 優秀な「学習指導案」の例（抜粋）

以下、学生が作成した優秀な「学習指導案」の例を提示する。

① 単元（題材）名 「ものをつくるしごと－タケノコをそだてる－」（3年）

② 単元の目標

地域の重要な生産活動は、自然的条件や社会的条件と重要なかかわりがあることを見学や調査を基にした学習により、理解を深めるようにする。

③ 単元設定の理由

福岡県の生産活動のシンボルとして「タケノコ」を取り上げる。日本で取れるタケノコの約35%を占め、日本一の生産量を誇っている。福岡県で多くのタケノコが生産される理由は、全国有数の竹林面積を有する福岡県北九州市の合馬（おうま）地区にあり、良質な粘土質土壌で土層も深く、質の良いタケノコが取れ、自然的条件にめぐまれている。

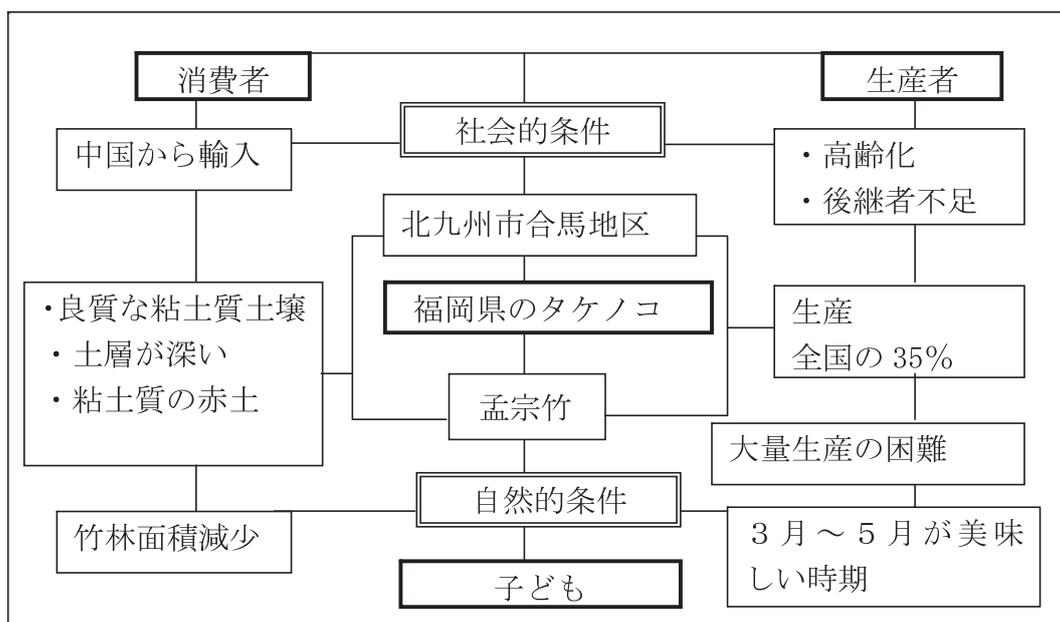


図3 「福岡県のタケノコ」 ウェッジングの基本的視点

合馬タケノコは孟宗竹の竹林に粘土質の赤土を敷き詰める客土と油粕などの有機肥料を使うなど、手間をかけることで、アクが少なくやわらかなタケノコとして、地元はもとより関西方面など各地に送られる貴重な一品である。

これらに加え、タケノコ栽培は消費者のニーズが高く、高齢者や女性も取り組みやすい労働力軽減型の中小型のタケノコ栽培技術の開発という社会的条件が相まって日本一のタケノコ生産地になっている。

④ 単元構成（全12時間）

時	主な問い	ウェッジング法活用の視点
1 ・ 2	○「タケノコ」から何をイメージしますか。 ・タケノコとはどういった食事に使われているか。 ・タケノコにはどんな種類があるのだろうか。 ・タケノコにはどんな栄養が含まれているのだろうか。 ・タケノコはどこでどのくらい生産されているのだろうか。	○1「タケノコ」ウェッジング①（学習問題の発見・成立：（連想的拡張）
3 ・ 7	○タケノコが日本一の生産量を誇っている理由を調べてみよう。 <個別の問いの例> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・タケノコが日本一の生産量を誇ることができる条件とは何か</li> <li>・タケノコの特徴とはなんだろうか。</li> <li>・タケノコはどのような方法で収穫されているのだろうか。</li> <li>・タケノコの収穫はいつ頃からだろうか。</li> <li>・なぜ福岡県でタケノコの収穫量が増えたのだろうか</li> </ul> </div> ○なぜ福岡県ではタケノコが日本一生産されているのかを説明しよう。 ・「福岡県の合馬地区は良質な粘土質土壌で土層も深く質も良い。孟宗竹の竹林に粘土質の赤土を敷き詰め、有機肥料を使うなどの手間をかけることで、アクが少なくやわらかく、地元はもとより関西方面など各地に送られる貴重な一品です。」	○2「タケノコ」ウェッジング②（学習問題の追究：焦点化）
8 ・ 9	○福岡県ではなぜ日本一のタケノコの収穫を誇っているのだろうか。 ・福岡県ではいつからタケノコの収穫が始まったのだろうか。 ・タケノコの生産技術はどのようなものか。 ・タケノコの収穫はいつごろなのか。 ・日本一の生産量を安定して続けているのはなぜだろうか。	○3「タケノコ」ウェッジング③（学習問題の再構成：追思考）
10 ・ 11 ・ 12	○タケノコの需要をもっと高めるためにはどうすればよいか。 ○地域はどのような働きを行うことでタケノコを生産量を増やすことができるか。 ○福岡県はどんな特産品がありますか。 ・特産品とはなんだろうか。	○4「環境」ウェッジング④（学習問題の発展：転移・総合）

⑤ 本時の学習と指導（9時間目／12時間中）

⑥ 本時の目標

福岡県で生産量を全国で一番にすることができたタケノコを生産条件について恵まれた自然的条件や社会的条件に気づくことができる。

またタケノコを栽培するのに適している自然的条件がそろっており、生産技術や生産方式などの社会的条件も関係していることを知るることができる。

⑦ 本時の授業－学習過程－

学習活動	指導の意図と手立て ●評価の観点	資料
1. 本時の学習のめあてを確認する。	○子どもたちに前時までの学習の振り返りを行い、本時の学習の方向付けをするとともに学習問題を提示する。 ●本時の学習に関心・意欲を持っている。	
なぜ福岡県では多くのタケノコを生産することができるだろう。		
2. 「タケノコ」について班ごとにウェッピングにより分析する。	○児童が調べたことを基にして各班で協力しながら話し合い、ウェッピングにより自分の考えを学習問題に関連付けるようにする。 ●ウェッピング図の作成に意欲的に自分からかかわることができるか。	①九州の地勢図 ②福岡県中心の地図 ③タケノコの栽培方法が書かれた図
3. 「タケノコ」がたくさん生産される理由について各班で話し合う。	○各班で話し合ったことを学級全体に広げて学習問題を共有する。またタケノコ栽培の条件を自然的・社会的条件の両面から関係づけられるようにする。 ＜自然的条件＞ ・良質な粘土質土壌で土層も深く質も良い。 ・孟宗竹の竹林に粘土質の赤土を敷き詰め、有機肥料を使う ＜社会的条件＞ ・竹藪をきれいにするための活動 ・出荷・販売に関わる人々 ・農協組合の連携・協力	
4. 日本でタケノコが栽培されている場所（例：鹿児島県）と比較して考える。	○福岡県でタケノコが多く栽培される条件を整理することで自然的条件・社会的条件の素晴らしさに気づくことができるようにする。 ●児童たちが調べた成果を福岡県でのタケノコ栽培の条件と関連付けることができるか。	④タケノコの生産量ベスト5
5. 次時の学習について見通しを持つ。	○地図を用いて自然的条件をもとに栽培可能な場所を予測する。こうした活動を本時の学習と評価につなげる。 ●本時の学習内容を理解できているか。 ○次時調べてみたいことを考えて本時の学習の連続と発展を期待している。 ●自分でしっかりと考えることができるか。	1. 福岡県 2. 鹿児島県 3. 熊本県 4. 京都府 5. 石川県

上記の「学習指導案」は、「A+」の評価であった。その理由は、「福岡県のタケノコ」をテーマに、「自然的条件」、「社会的条件」、「生産者」、「消費者」、「子ども」の視点から、それぞれの関連性を「ウェッピング図」に示し（そのために必要十分な教材研究

を行い）、その知見に基づき、授業設計を適切に行うことができたと判断したからである。その判断の根拠とした「評価のポイント」について、次章で述べる。

#### 4. 「ウェッピング法」を用いた社会科授業設計における「評価のポイント」

評価規準を、以下のように設定した。

A+	A	B+	B	C	D
・地域の特産物に関し、「自然的条件」、「社会的条件」、「生産者」、「消費者」、「子ども」の視点から詳しく調べており、「なぜ、その地域で生産が盛んである	・地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」について詳しく調べているが、「なぜ、その地域で生産が盛んであ	・地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」について調べているが、「なぜ、生産が盛んであるか？」の主要発問	・地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」について調べているが不十分な部分が少しある。	・地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」について調べているが不十分な部分がかなりある。	・地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」についての調査が、全く不十分である。

か？」の主要発問に適切に答えられる学習内容を、十分に示している。	るか？」の主要発問に適切に答えられるだけの学習内容を、十分には示していない。	に適切に答えられるだけの学習内容を、十分には示していない。			
・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程は、ウェッビングの内容を十分に反映している。	・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程はウェッビングの内容をかなり反映している。	・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程はウェッビングの内容をかなり反映している。	・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程はウェッビングの内容を十分に反映していない。	・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程が不十分(ウェッビングが不十分のため)。	・「学習指導案(単元計画を含む)」の学習目標(めあて)や、学習過程が極めて不十分(ウェッビングが不十分のため)。

最上位の評価の「A+」の評価規準は、「地域の特産物に関し、『自然的条件』、『社会的条件』、『生産者』、『消費者』、『子ども』の視点から詳しく調べており、『なぜ、その地域で生産が盛んであるか?』の主要発問に適切に答えられる学習内容を、十分に示している」、「『学習指導案(単元計画を含む)』の学習目標(めあて)や、学習過程は、ウェッビングの内容を十分に反映している」と設定した。前者は、ウェッビングの作成作業を通じて、授業設計者が必要十分な知識の構造を図れたかという「教材研究の観点」の評価であり、後者はその知見を基に適切に「学習指導案(単元計画を含む)」を作成できたかどうかという「授業設計の観点」の評価である。

「A+」評価の具体的事例として、例えば、前述の「福岡県のタケノコ」(3年)では、前者に関し、タケノコ生産日本一を誇る福岡県の「自然的条件」として、「良質な粘土質土壌、土層が深い、粘土質の赤土、大量生産の困難」等をウェッビング図に挙げている。「社会的条件」としては、ウェッビング図には、「高齢化、後継者不足」や「中国から輸入」といった課題しか挙げられていないが、「本時の授業-学習過程-」の中で、「竹藪をきれいにするための活動」、「出荷・販売に関わる人々」、「農協組合の連携・協力」の3点を挙げている。「生産者」の視点では、「高齢化、後継者不足」という課題の他、「本時の授業-学習過程-」の中で、「孟宗竹の竹林に粘土質の赤土を敷き詰め、有機肥料を使う」、「出荷・販売に関わる人々」、「農協組合の連携・協力」等の「生産者」の「工夫や努力」が挙げられている。「消費者」の視点では、「中国から輸入」が挙げられており、消費者の嗜好がより安価な海外産に向けられつつある点を課題としている。「子ども」の視点からは、「3月~5月が美味しい時期」としか挙げられていないが、「子ども」の視点から、前述の「自然的条件」、「社会的条件」、「生産者」、「消

費者」の視点をトータルに関連付けた全12時間の単元構想を通じて、「福岡県のタケノコ」を通して社会がわかることがめざされていると評価した次第である。なお、この「福岡県のタケノコ」の学習指導案が完璧という訳ではなく課題もある。例えば、ウェッビング図や「学習指導案」に、「福岡県のタケノコ作り」や「人間の知恵(タケノコ作りのために工夫や努力をした先人の具体的事例)」が欠如している点である。この点についても、「図2」と比較すれば、容易に気付くことができる。

次善の評価である「A」の評価規準は、「地域の特産物に関し、『自然的条件』、『社会的条件』、『生産者』、『消費者』、『子ども』の視点から詳しく調べているが、『なぜ、その地域で生産が盛んであるか?』の主要発問に適切に答えられるだけの学習内容を、十分には示していない」、「『学習指導案(単元計画を含む)』の学習目標(めあて)や、学習過程は、ウェッビングの内容をかなり反映している」と設定した。

例えば、「熊本県の馬刺し」(3年)では、「馬刺しがなぜ熊本の郷土料理になったのか考えよう」と、せっかくな確なテーマ設定をしているにも関わらず、「馬刺しの歴史」として「薬膳料理、朝鮮出兵」を挙げ、「畑仕事で使いものにならなかった馬」を馬刺しの供給源として「ウェッビング図」に挙げるのみで、「馬刺しの歴史」の詳細や、畑仕事以外の供給源等に関する内容を調査し、解明していないため、「馬刺しがなぜ熊本の郷土料理になったのか」という主要発問に適切に答えられるだけの学習内容が十分に示されていないのである。従って、それに基づく学習指導案も今一步の段階に留まるのである。授業設計者自身が、詳細に調査分析せず理解していない学習内容を、小学生に「調べ学習」の指導をして「這い回る経験主義」に陥るに過ぎなくなることは、「ウェッビング図」を一覧しただけで判断でき

るのである。「A」の評価規準は、いささか甘いようだが、これは大学3年生ということを勘案したためである。本学では4年生の6月に小学校教育実習が予定されており、4～5月に「教育実習」の事前指導も行われることより、そこでの指導により改善を図ることが可能だからである。後述の「表2」に「2013年秋学期（3年）80名の成績分布」を示したように、同学期では80名中「A+」が14名、「A」が26名と、上位2評価に、全体の半数の40名が含まれた。従って、授業担当者としては、かなり安心した次第である。

次の段階である「B+」の評価規準については、「地域の特産物に関する『自然的条件』や『社会的条件』について調べているが、『なぜ、生産が盛んであるか?』の主要発問に適切に答えられるだけの学習内容を、十分には示していない」と設定した。前者について「A」との違いは、「詳しく調べている」ではなく「調べている」に留まる点である。後者について「A」との違いはない。「B+」の「学習指導案」の特徴を端的に述べれば、「多面的だが追究不足」ということに尽きる。せつかく「ウェッジ図」には、多面的に各項目を挙げながら、その調査が十分でないため、「なぜ、生産が盛んであるか?」の主要発問に適切に答えられるだけの学習内容を十分には示していないのである。

例えば、「佐賀のり」（3年）では、「秋のり、冬のり、年2回の一番摘みが伝統」等の様々な項目を挙げながらも、肝心の「佐賀のり」の歴史についての検討が不十分なため、「なぜ、生産が盛んであるか?」の主要発問に適切に答えられていないのである。

さらに次の段階である「B」の評価規準については、「地域の特産物に関する『自然的条件』や『社会的条件』について調べているが不十分な部分が少しある」、「『学習指導案（単元計画を含む）』の学習目標（めあて）や、学習過程はウェッジの内容を十分に反映していない」と設定した。内容的にかなり課題の残る学習指導案である。例えば、「小城羊羹」（3年）では、「自然的条件」として「小城市の地形」を挙げているが、「小城市は佐賀県のほぼ中央にある」、「佐賀市に隣接」、「佐賀平野の西端」、「ムツゴロウ・シオマネキ保護区」という、「小城羊羹」の歴史・起源に直接的に関係ない項目を列挙するに留まっている。この点に関し、同じ「小城羊羹」を題材にした3名の「A」評価の「学習指導案」

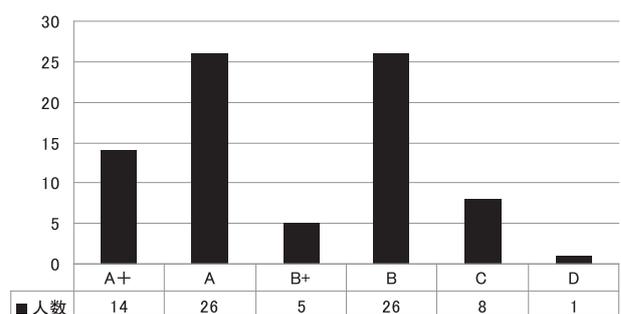
では、例えば、小城羊羹の歴史として「村岡安吉、森永惣吉」といった人名や、「交通・運輸」として、「シュガーロード」、「長崎街道」等の項目が挙げられている。「なぜ、小城市内には20軒以上の羊羹屋が集中しているのか?」について、適切に答えられるだけの学習内容を十分には示していないものの、ある程度の答えを調べようとしている。

「表2」の成績分布にあるように、「A+」や「A」という比較的好成績の者が40名と、全体の半数を占めたのに対し、「B」+が5名、さらに「B」以下に留まる者が35名もいたというのが課題である。

特に、低い段階の「C」（8名）、「D」（1名）については、内容的に課題の多い「学習指導案」であった。「C」の評価規準については、「地域の特産物に関する『自然的条件』や『社会的条件』について調べているが不十分な部分がかなりある」、「『学習指導案（単元計画を含む）』の学習目標（めあて）や、学習過程が不十分（ウェッジが不十分なため）」を設定した。例えば、「有明のり」（3年）では、「のりについての歴史」の項目の内容として、「いつごろからつくられるようになったか?」、「いつから有名になったか?」という問題提起があるものの、その具体的内容が「学習指導案」で全く触れられていない。

「D」の評価規準については、「地域の特産物に関する『自然的条件』や『社会的条件』についての調査が、全く不十分である」、「『学習指導案（単元計画を含む）』の学習目標（めあて）や、学習過程が極めて不十分（ウェッジが不十分なため）」を設定した。「D」評価の「熊本県の辛子レンコン」（3年）の事例では、「自然豊か」、「物産館」、「観光局」等の項目の提示に留まり、「どういう『自然的条件』が自然豊かといえるか?」、「物産館」や「観光局」で「社会についての何が明らかになるのか」が全く

表3 「2013年秋学期（3年）80名の成績分布」（筆者作成）



表れていない。「学習指導案」では、「辛子レンコンはいつ作られた等さまざまなことをワークシートを使いながら、グループで調べていく」という希望的観測を述べるに過ぎない（授業設計者自身が調べもしない内容を、小学3年生に委ねようとする所に無理が生じている）。

## 5. おわりに

本稿では、筆者が、科目「社会科指導法」（対象：3年以上）（2013年度秋学期）において、ウェッビング法を活用した「地域教材開発」の指導の際に学生が作成した学習指導案（単元指導計画）80人分を研究対象として、小学校社会科「地域教材開発」におけるウェッビング法の有効性を明らかにした。

具体的には、關浩和の「社会科ウェッビング法」を活用した結果、受講生の80名中40名が、「A」評価以上の、「地域の特産物に関する「自然的条件」や「社会的条件」について詳しく調べている」レベルの良好なウェッビング図を作成し、「『学習指導案（単元計画を含む）』の学習目標（めあて）や、学習過程はウェッビングの内容をかなり反映している」レベルの「学習指導案」を作成できることを明らかにした。

しかし、残り半数の学生のウェッビング図や「学習指導案」が、不十分な段階に留まっている点が課題である。

今後は、同様の「課題」を試行する中で、より多くの受講生が、よりよい「学習指導案」を作成することをめざしたい。その際、これまでの「学習指導案」の例や評価規準を事前に公表する等の工夫を行っていきたい。

### （主要参考・引用文献）

社会認識教育学会編『小学校社会科教育』学術図書出版社、2010年。

關浩和『ウェッビング法—子どもと創出する教材研究法』明治図書、2002年。

關浩和『学力の質的向上をめざす社会科授業の創造』明治図書、2005年。

關浩和『情報読解力形成に関わる社会科授業構成論—構成主義的アプローチの理論と展開—』風間書房、2009年。

### 〔注〕

- 1 社会認識教育学会編『小学校社会科教育』学術図書出版社、2010年、p. 26。
- 2 前回の学習指導要領改訂〔1998（平成10）年告示、2002（平成14）年から実施〕から、小学校第3・4学年の目標が2学年まとめて示されている。共に身近な地域社会を対象としているため、2年間を見通して指導計画を作成することにより、各学校や地域の実態に合わせた弾力的運用を可能としたのである。
- 3 例えば、佐賀県や佐賀市の副読本として以下がある。  
佐賀県小学校教育研究会社会科部会編『わたしたちの佐賀県（改訂新版）』光文館、2011年。  
佐賀市教育委員会『わたしたちの佐賀市』佐賀市教育委員会、2008年。但し、現在は、電子データ版となっている。
- 4 このような理由に基づき、従来、社会科「地域学習指導の困難性」が指摘され続けてきた。例えば、伊藤貴啓・小野晃伸「教員養成大学における社会科教員としての資質能力の育成と社会科副読本の協同的作成—大学院生による地域教材開発力育成の試み—」愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻『教育開発学論集』第2号、2014年、p. 44参照。
- 5 「小学校学習指導要領 第2章 第2節 社会」〔第3学年及び第4学年〕の「目標」記述より。
- 6 關浩和『情報読解力形成に関わる社会科授業構成論—構成主義的アプローチの理論と展開—』風間書房、2009年、p. 195。
- 7 關、同上書、2009年、p. 196。
- 8 關、同上書、2009年、p. 198には、6学年の歴史学習など、より広範な学習に対応可能な「ウェッビング法の基本的な視点」が挙げられている。但し、本稿では、より「地域の特産物」の学習に焦点化させるため、簡略化された、社会認識教育学会編、前掲書、2010年、p. 70の『「広島かき」ウェッビングの基本的視点』の基本的なフォーマットを採用した。
- 9 社会認識教育学会編、前掲書、2010年、p. 69。
- 10 關、前掲書、2009年、p. 197。
- 11 社会認識教育学会編、前掲書、p. 70及び、關、同上書、2009年、p. 204より抜粋した。

- 12 「灰汁巻き(あくまき)」鹿児島県 HP より (<http://www.pref.kagoshima.jp/af09/foreign/japanese/profile/gaiyou/3c5.html>) 2015/01/09閲覧。